

多国籍企業労働組合の国際会議にて

いとう あきひで
伊藤 彰英

●基幹労連・事務局次長

先達て、ある多国籍企業の労働組合による世界会議がグアテマラで開催された。本会議は、同じ多国籍企業の各国・各職場で発生する課題の共有化、働く者の権利の確保と生活の向上等を目的として毎年開催されているが、今回はとくに印象深い会議であったので紹介させていただきたい。なお、グアテマラの労働組合と表記している部分については、当該工場の労働組合であることをご理解願いたい。

グアテマラでは、20人以上の労働者の参加のもとで政府に承認されれば、正式に労働組合としての活動が認められる。本会議に参加したグアテマラ工場では5年前に労働組合が結成されており（もちろん政府承認）、法律によって労働者および労働組合の権利が確保されているはずである。ところが、経営はその事実を公然と無視しており、労働組合を支持する従業員に対して賃金カットや解雇などの不当労働行為を繰り返している。

また、業界団体からの圧力を受けて、政府は行政としての役割を果たそうとせず、マスコミは萎縮して労働関係の記事を取り扱うこともない。こうしたことも影響して、労働組合の存在や役割は多くの国民に認知されていない状況にあり、労働者は雇用と生活を確保するために、過酷な労働環境にあらうと組合加入に消極的になってしまっている。

結果的に、グアテマラの労働組合は政府から承認を受けているものの、結成以来、団体交渉の実現にすら至っていない。労働組合としては他国のように良好な労使関係を築きたいと願うが、むしろ法律の庇護のもとに辛うじて排除さ

れずにいるという状況であり、労働組合の存在自体が風前の灯火となっている。同じ多国籍企業の労働組合であるにもかかわらず、あまりに大きな違いである。

そこで会議の参加者は、グアテマラの労働者のおかれた環境を変えるため、急遽工場の門前で、従業員のシフト交替のタイミングとなる早朝6時に抗議集会を開催し、労働者の権利の確保と団体交渉の早期実現を各国の言語で代わる代わる訴えた。数十人の武装警備員と警察、会社が雇った傭兵に監視されながらの抗議集会であり、背筋が凍るような緊張に包まれていたが、当初は遠巻きに眺めていた労働者も次第に集会ビラを受け取るようになり、通勤バスの運転手はクラクションを鳴らしながらエールを送るようになっていった。もちろん経営側が顔を見せることはなかったが、何某かのメッセージを残すことはできたのだと思う。

ただし、集会当日は労働組合のみならず労働者に団結と連帯、勇気を与えることができたものの、本当に大変なのはこれからである。代表団が帰国した後は、まさに現地の労働組合および労働者の取り組みに委ねられることになる。

グアテマラを一例に挙げたが、中南米の経済発展は目覚ましいものの、まだまだそれに見合う社会システムが構築されていない。とりわけ働く者の権利という観点においては、その存在すら十分に知られていない。抗議行動に対して涙を流して喜んでくれたグアテマラの労働組合のために、はたしてどのような国際的支援ができるのか考えさせられた。